

□海外文献紹介□

潰瘍性大腸炎の増悪における季節的変動

Seasonal variation in exacerbations of ulcerative colitis: Tysk C, Järnerot G (Scand J Gastroenterol 28: 95-96, 1993)

潰瘍性大腸炎の再燃の因子として、精神的ストレス、上気道感染、胃腸炎、薬剤服用などが示唆されてきたが、否定的な報告もある。季節の関連について9月から2月にかけて高い再燃率が示されたり、8月から1月にかけて再燃や発症が多いことが報告されている。また、別の報

告では、春秋に再燃率が高いという。

著者らは1977～1988年の間の症例で、再燃および最初の診断時の月別変動をretrospectiveに分析した。患者は373人で、診断時の月別分布と、salazopyrinあるいは5-アミノサリチル酸を維持投与中の338人における1,013回の再燃の月別頻度を出した。その結果、再燃のピークは春(3月)と秋(8～11月)にあり、夏(6～7月)は低かった。診断月については季節的傾向を認めなかった。

季節性の所見は、微生物学的因子が潰瘍性大腸炎の増悪に関与することを多分示唆しているのだろう。上

気道感染、エンテロウイルス、サルモネラ、キャンピロバクターらは季節的疾患であり、特に後3者は晩夏と秋に感染のピークがある。この研究結果は他の4つの報告とほぼ一致している。6～7月は夏休みなので、軽い再燃があっても自然治癒し、受診しないので実際より過小評価されているかもしれない。

著者らの結論は、季節因子が潰瘍性大腸炎の増悪、再燃に影響を及ぼす可能性があるとの仮説を支持している。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)